

〔日本書紀七景行〕四十年六月、東夷多叛、邊境騒動、七月戊戌、中則天皇持斧鉞以授日本武尊曰、朕聞其東夷也、識性暴強、○中見怨必報是以、箭藏頭鬚刀佩衣中、

〔古事記中裏〕忍熊王以難波吉師部之祖伊佐比宿禰爲將軍、太子神御方者、以丸邇臣之祖難波根子建振熊命爲將軍、○中爾建振熊命權而令云、息長帶日賣命者既崩故無可更戰、即絕弓絃、欺陽歸服於是、其將軍既信詐、弭弓藏兵、爾自頂髮中、探出設弦佐_{一名云豆留}更張追擊、

〔古事記傳三十二〕頂髮中は多藝布佐能那加と訓べし、書紀に此を髮中とあるを然訓、又景行卷に、箭藏頭鬚崇峻卷に、作四天王像置於頂髮などあるをも皆然訓り、多藝は髮を揚たるを云、布佐は其揚て集めたる髮の繁きを束ねたる處を云、總又物の多きを總集むるを、布佐奴と云など、同言なり、万葉に、髮たぐと多くよめり、揚る云、されば、頂髮は後に云本取のことなり、故師モトハリと訓れど、其は申古よりの名とこそ聞ゆれ、

〔古事記二節〕業平朝臣盜二條后宮仕前將去之間、兄弟達昭宣公等追至奪返之時、切業平之本鳥云々、仍生髮之程、稱見歌枕發向關東、

〔枕草子七〕むとくなる物

翁のもとへりはなちたる

〔源平盛衰記三〕殿下事會

關白殿基房原コレヲバ爭可知召ナレバ、大内ノ御直廬ヘト思食テ、常ノ御出仕ヨリモ花ヤカニ、前駆御隨身殊ニ引繕セ給テ、中御門、東洞院ノ御宿所ヨリ、大炊御門ヲ西ヘ御出ナル、堀河猪熊ノ邊ニテ、兵具シタル三十騎計走出テ、前駆等ヲ搦捕ケリ、安藝權守高範バカリゾ、御車ニ副テ離ザリケル、式部大輔長家、刑部太輔俊成、左府生師峯等モ、本ドリヲキラル、結句車ノ物見打破、太刀長刀ヲ進ケレバ、只夢ノ御心地ゾシ給ケル、高範車ヲ廻テアヤツリ禦ケルヲ、難波太刀ヲ振テ御車